コメントＢ：大堀良博（高校の日本語教室から）

学習環境境の整備に向けた意識改革と連携

大堀　御紹介に預かりました大堀と申します。よろしくお願いします。私どもは公立の高等学校ということでして、少しその辺りの立地条件に違いがあります。小・中の義務教育とは違いますものですから、どうしても入り口と出口の問題を抱えることになります。つまり、高校入試と大学・専門学校、あるいは就職の試験といった入り口と出口の間をどう繋いでいくか、また入り口そのものをどうするか、出口をどう構成していくかということの 3 点が、今なかなか繋がっていかない状況にあります。ましてや、まだ、外国人子女の受け入れを始めてから 2 年目でして、卒業生も出しておりませんので、何とか流れといいますか、カリキュラムをはじめとして人間や施設も含めた一つのシステムを作ろうと必死になっております。どうも行政に働きかける文章ばかり書いているものですから、ついつい中身が暗いものばかりになってしまって申し訳ありません。こういうことも含めまして、いろいろな情報を収集している段階なものですから、大変まとまらないことですけれども、せめて何点か課題的なものを申し上げさせていただきたいと思います。

現在、何とか 2 年目を迎えまして、子どもたちを育てていく形が学校全体の雰囲気の中で出来上がりつつあると実感しております。埼玉県では現在４校が外国人生徒の受入れをしているのですが、他の学校ではなかなかそこまでいってはいないように見受けられます。ただ、何とか入れるには入れたけれども、途中で本当にどうしようかとお手上げの状態になってしまっている生徒たちがいます。その生徒たちは会話どころか、小室の歌を全部歌えるぐらいの日本語力を持つ生徒たちなのですけれども、いざ筆記で勉強をして問題の答えを出すという段になりますと、全く手が動かない。いろいろカウンセリングなどもやってみたのですけれども、家庭からもなかなか理解がもらえない。そういったことがありまして、今本当に行き詰まってしまっています。また一方では、全く会話ができない生徒の例ですが、毎日帰る時に一緒に帰る友達が違っておりまして、にこにこ笑って対応しているのですが、たぶん話はわからないだろうなあと思います。それでも平気で、例えば、茶髪の子と一緒に下校したり、普通の生徒だったら少し敬遠してしまうような生徒たちとも平気で付き合えてしまって、一体この付き合い方は何なのだろうと私たちも非常に不思議に思えるような行動も窺えます。ことばを我々は中途半端に概念で捉えてしまいますけれども、そういうものを越えたところに何かあるのかもしれない。かえって生徒たちの生活を見ていると、私たちがもう一度心を洗い直して対応しなくてはいけないのではないだろうかということを実感している次第です。

多々問題があるのですが、先ほどの足立さんの御発表のように、これからはもう少し開かれた状況に持っていって、私どもだけではやはり手一杯ですから、いろいろな形での協力関係が何とか構築できないだろうかと、今こちらの研究所にもお世話になりながら、ネットワーク作りのようなところから広げて行こうという段階にあります。

とにかく、いろいろな実践を行いつつあるのですが、振り返ってみますと、逆に一般の子どもたちにこれだけやってあげられたら、もっと伸ばしてあげられるのになと、今まで

私たちは一体何をしていたのだろうと考えさせられることばかりです。また、今までやってきた国語教育とは一体何だったのだろうということが、私ども国語科教員の中で、一番の話題となっています。この機会に皆さんのお話を伺いながら、何か一つでも学校にもって帰りたいと思います。全くコメントにならなくて、申し訳ありませんでした。

吉野　ありがとうございました。それでは、引き続き東京女子大学の上野さんにお願いいたします。